

4 Smart Data Platform

ソフトウェアとインフラの融合で データ利活用を支えるデータプラットフォーム

「NTT Communications Digital Forum 2020」では NTT コミュニケーションズ（以下、NTT Com）の新たな事業ビジョン “Re-connect X™” 実現に向けた柱の1つ、データ利活用を支えるプラットフォーム “Smart Data Platform”（以下、SDPF）に関する講演や展示も多く見られた。本特集では特別講演の内容も交え SDPF について紹介する。

データ利活用を End to End で 実現する SDPF

SDPF は展示の解説を引用すると「データ利活用に必要な各機能とインフラをセットにした」ものだ。図1に示すようにデータの収集・蓄積に必要なネットワーク（以下、NW）・クラウド・クラウド型ストレージなどの「インフラサービス」、「データマネジメント機能」、「データ分析・可視化

機能」、「マネージド・セキュリティサービス」で構成され、「Apps On SDPF (SaaS)」が SDPF でのデータの利活用を機能させる。これらのアセットから必要なものをワンストップで提供することにより、データ利活用を End to End で支えることが可能だ。

多様なサービス/ソリューション

展示ではお客さま拠点やデータセ

ンター（以下、DC）、各種クラウドサービスをセキュアに接続し、NW 帯域やセキュリティ、ルーティングの設定も容易な NTT Com のインターコネクトサービス “Flexible InterConnect”、また散在するデータの収集・統合・蓄積を実現する米インフォマティカ社のデータインテグレーションサービス “インフォマティカソリューション” など、SDPF を構成する主要なサービス/ソリューションが関心を引いた。

また手間無くサブスクリプション型ビジネスを開始できるサブスクリプション支援サービス “Subsphere” のように SDPF を活用して提供されデータの創出元でもある SaaS、さらに SDPF を活用した IoT や企業間で機密情報を安心・安全に開示できるデータ流通管理基盤の構築など、さまざまな取り組みについて紹介された。

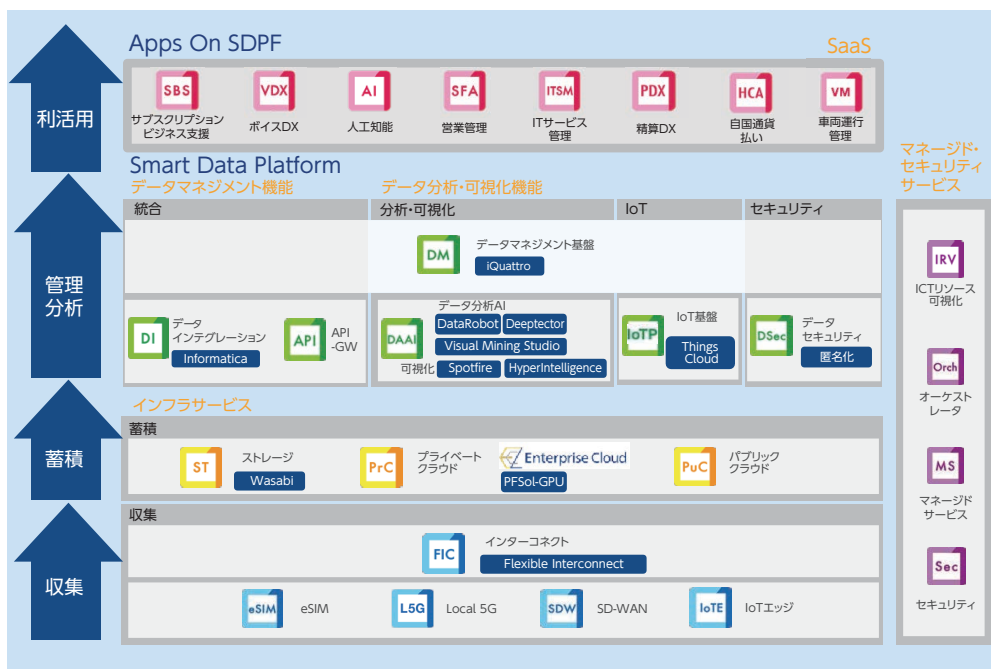


図1 Smart Data Platform 全体概要 (展示資料より)

ビジネスモデル構築や ソフトウェア開発に注力可能

特別講演では、取締役 データプラットフォームサービス部長の佐々倉秀一氏が NTT Com の技術顧問である Tably 株式会社 代表取締役 Technology Enabler の及川卓也氏と対談し、SDPF の開発経緯について次のように語った。

「アプリやシステム、さまざまな拠点やエッジ、クラウド、DC、あらゆる場所で膨大に発生するデータは、ネットワークを介して行き交っています。真の DX 実現の鍵となるデータ活用は、まさにこの膨大なデータを活かしたデータとし新たな価値を創出することが重要なのです。NTT Com は SDPF を通じ、ネットワーク上で行き交うデータの統合から、データ蓄積、データ利活用に必要な機能をトータルかつワンストップで提供することで、お客様の企業データすべてを包括的に管理・運用する環境をご提供します。お客様はデータ収集や加工、可視化などのデータ利活用のための準備負担が軽減され、データの利活用を通じた新たなビジネスモデルの創出や、独自のソフトウェア開発などの価値創造に注力していただけるようにすることが狙いです。」(佐々倉氏)

サービスの単純な組み合わせではなくデータ利活用の全体最適化

対談では競合サービスと比較した SDPF のアドバンテージについても語られた。まず強調されたのは自社サービスにこだわらず各分野におけるベストなパートナーと協力してデータ利活用に必要なサービスを提

供することが可能であり、しかも単なるサービスの寄せ集めではないという点であった。

なぜなら NTT Com は NW/DC/クラウドサービスを提供してお

り、ICT インフラ全体を見通した設計を得意としている。また近年は SD (Software Defined) 技術をはじめとするソフトウェア開発力も高めてきた。これによりデータ利活用に必要な様々な要素を組み合わせ全体として捉えた上で、NW からデータマネジメントまで End to End で設計に反映することができる。この強みを活かしデータ利活用部分の最適化ではなく、ネットワーク設計などアンダーレイヤーまで含めた全体設計を行い、お客さまへ提供している。

分散したデータをつなぐ事を強みにデータ連携を支援

Smart City などの取り組みで扱うのは自社のデータに加え、公共データなど機密性の高いものも存在する。また、さまざまな企業や組織と分散したデータを連携する必要もあり、セキュアな NW 環境を含む SDPF を活用している。

加えて、NTT Com はさまざまな事業者に対し NW / DC / クラウドサービス等をグローバルに提供している。そうしたお客様の分散したデータを結び付けやすいこともアドバンテージの 1 つとして挙げられた。

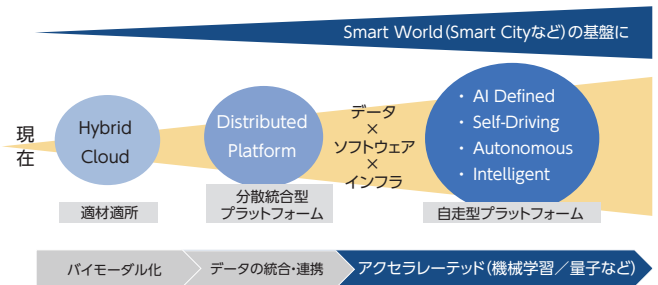


図2 データプラットフォームのこれから (特別講演より)

SD/ソフトウェア化を推進する 未来のデータプラットフォームとは

現在はオンプレミスシステムや各種クラウドを適材適所で組み合わせたハイブリッドクラウドによるデータプラットフォームが増えている。前述の対談では今後のデータプラットフォームについても語られた。

「エッジコンピューティングも活用するなど、データのある場所、処理する場所が適材適所でさまざまに分散していくと考えており、NW やクラウド基盤の SD 化をより加速させ、分散化の時代に備えています。さらにはいよいよ AI Defined や Self-Driving などのいわゆる『自走型プラットフォーム』の世界に向かっていくと思いますので、その方向性に沿って改革を進めています。」(佐々倉氏)

今後ますます新しい技術が導入されると考えられるが、最新技術であってもすぐに陳腐化する。いかに最新の技術を取り入れ進化し続けるかが重要であり、その意味でも自走型・自律型というものがいろいろなところで必要になっていくのではないかとこの考えも示された。

「そのためにもますますサービスの SD 化、そして我々自身の組織、人材、風土のソフトウェア化を進めています。」(佐々倉氏)